



学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.33

発行日 ● 平成29年(2017)3月15日

もくじ

ごあいさつ.....	1
小金井清明寮のこと.....	2~3
学習院大学史料館からのお知らせ.....	4



小金井清明寮玄関

ごあいさつ

弘化4年(1847)の京都御所東側における学問所の設置が学習院の一つの起源であり、ここから数えると今年で170年となります。また華族学校が神田錦町に開設された明治10年(1877)から数えると、140年となります。そのため今年の学習院の式典も活発化しますが、それに先んじて、大学史料館では世間にそれほど知られていない小金井清明寮について御紹介することに致しました。この寮は、年表が示すようにごく短い間の存在ですが、ここに書かれてありますように学習院の歴史においてその意義は深いと思います。御寄稿頂いた宮島清様にはこの場を借りて御礼申し上げます。皆様にはミュージアム・レターを通じて、我々史料館の活動を身近に感じて頂ければ幸いです。

(館長 上田隆穂)

小金井清明寮について

学習院は、明治10年(1877)、華族の子弟のための学校として創立された。同17年(1884)に宮内省所管の官立学校となってからは、戦後に私立学校となるまで、寄宿舎が設けられ、共同生活によって学生を教育することが重視されてきた。神田、虎の門、四谷とキャンパスを移し、明治41年(1908)、中・高等科が目白へ移転。以来、本館や正堂、教室棟、寄宿舎などを有する恵まれた環境であったが、昭和20年(1945)4月の空襲により、キャンパス内の木造建造物の大半が全焼した。

終戦となり翌年に授業が再開された際には、中等科3年生以上および高等科生は焼失を免れた西一号館で、中等科1・2年生は東京府北多摩郡小金井町(現・小金井市)の文部省の教学錬成所跡で受講することとなった。

小金井キャンパスは中央線武蔵小金井駅から徒歩30分ほどの立地。3万坪の敷地には、光華殿を中心に、本館、教員の学寮、屋内体育場など簡素な木造建築が配されていた。なお、皇太子明仁親王殿下の御仮寓所が、この地に葉山御用邸の具奉員宿泊所の建物を移築して設けられていた。

昭和21年(1946)9月、教学錬成所時代に教員の学寮であった建物を第17代院長・山梨勝之進が「光雲寮」と名付けて寄宿舎とし、遠距離通学者を中心に約20名が寮生となった。同寮は、昭和23年度(1948)末に中等科が新宿区戸山の女子部の一角の校舎に移転したため閉寮。翌年度には、「清明寮」と名称を変え高等科の寄宿舎として再び利用されることとなった。当時高等科学生だった皇太子明仁親王も他の寮生と生活を共にし、目白の高等科へ通学されていた。

食糧確保もままならない戦後の混乱と荒廃の中で誕生した小金井キャンパスや小金井清明寮の精神は、焦土から新たに歩み出した目白キャンパスおよび目白清明寮へと継承されることとなる。

本号では、小金井清明寮の寮生であった宮島清氏に御寄稿をお願いした。本紙が、終戦直後の学習院を語る上で重要な場所の一つである小金井キャンパス、そして小金井清明寮の歴史的意義を再検討することの一助となれば幸いです。

目白清明寮については、設計資料や元寮生の聞き書きを『学習院大学史料館紀要』22号「小特集 学習院の寄宿舎—目白清明寮—」(2016年)で紹介し、小金井清明寮についても野村雄三氏が説明されている。今後詳細については、“小金井清明寮”として戦後の学習院新制中等科及び新制高等科の去就と皇太子殿下ご教育との関係を辿ることも含め、紀要で小特集を編集することを計画している。

(学芸員 富田ゆり、丸山美季)